

# 仙台市市民文化事業団主催の企画展 「社交と嗜好品」交際の場の飲食物」 における講演「仙台における茶道の 歴史と社交」



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世  
仙台藩志会副会長  
東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑(康)

仙台市市民文化事業団が主催した「社交と嗜好品」交際の場の飲食物」と銘を打った企画展が、昨年七月十五日～十一月十二日まで仙台市歴史民俗資料館において開催された(図1)。本企画展の趣旨は、嗜好品が個人の嗜好によって消費されるだけでなく、人と人を結び付ける場でも用いられるため、嗜好品がもつ社会的な意味に注目し、その歴史や種類、消費、文化等について、仙台地方の例を中心に理解を深めてもらう点にある。

この内容は、「展示解説」と「講座」の二つに大別され、前者はその開催期間中は展示室に常時展示され、仙台藩石州流清水派(当流)の展示の場所の壁面に「仙台藩と石州



図1 今回のイベントのチラシ

流清水派」の題で、仙台藩に当流が確立していく歴史的過程の解説文が掲示され(図2)、またその右側には「石州流清水派茶道頭・宗家継承の証である三つの文献(三種の神器)」の写真とその解説文がそれぞれ展示された(図3)。その壁面の下方の展示台には、仙台藩茶道頭・宗家累代の茶碗及び茶入の写真(図4)が、またその右側に平成八年五月に行われた第八回石州流茶道全国大会(仙台大会、会長十世故大泉道鑑)の歓迎茶会のために当流が実際に用いた会記とその解説文がそれぞれ展示された(図5)。なお、筆者はこれらの展示資料の写真や情報を提供してこのイベントに協力させて戴いた。

## 仙台藩と石州流清水派

伊達政宗は若い頃より茶の湯に精通しており、茶の湯をとおして將軍や大名、茶人などと交流を深め、政治や外交に活かしてきた。また、政宗は千利休や古田織部、小堀遠州と交際し、最新の茶の湯を仙台にもたらししている。政宗が仙台に茶の湯文化を根付かせるために自身の茶道頭として採用したのは、古田織部の高弟であった一世清水道閑であった。また、二世清水動閑は2代藩主・伊達忠宗の命で片桐石州貞昌に茶の湯を学び、伊達家の茶の湯を徳川家と同様の石州流に改める基盤を固めた。そして、三世清水道竿は石州流清水派を仙台藩に確立させるとともに、全国に流儀を広めた功績から、石州流清水派の祖と称されている。この清水家は五世道斎以外は、代々「どうかん」を名乗り、茶道頭として伊達家に仕えた。

石州流清水派の点前には、藩主のための大名茶であることによる、大きく3つの特徴がある。一つは、座礼は膝の横に拳をついて、家臣が藩主の前でかしこまる形で行うことである。二つめは、茶釜に対して斜めに向き、藩主から美しく見えるようにしていることである。そして、三つめは、茶碗を回さずに飲むことである。茶碗を回す所作は茶碗の景色（色や形）を汚さないための客の気遣いに由来するが、石州流清水派の場合、正客は藩主であることが多いため、そうした気遣いの必要がないからである。

また、石州流清水派には藩主以外には決して供されない「極真の手数」という点前があり、これは宗家のみに伝えられる点前である。

図2 仙台藩の石州流清水派の確立した経緯

一方、後者の講座では昨年八月六日に筆者による「仙台における茶道の歴史と社交」という演題の講演により、火蓋が切って落とされた（図6）。その後、花京院健康管理センター所長清治邦章氏による「嗜好品の歴史的变化に伴う健康への影響」（九月九日）、元たばこ塩の博物館主任学芸員谷田有史氏による「日本における酒・茶・煙草の受容」（九月二十三日）及び仙台紅茶教室・ブリティッシュスクール主宰井上典子氏による「紅茶の世界」（十月二十九日）という演題の講演が順次行われた。

筆者の講演については、紙面の都合を考慮して、強調したい点のみを、当日に使用したスライドの一部を示しながら、以下に簡潔に述べたい。

茶の湯の歴史と社交に関する筆者の講演は、唐時代の「中国の喫茶の始まり」から開始され（『陸羽著『茶経』』、次に奈良時代・平安時代の「我国の喫茶の始まり」に目を転じた『公事根源』『凌雲集』）。更に、鎌倉時代前半に「禅に裏打ちされた抹茶の飲み方（禅院茶礼）」が確立・定着した経緯を解説した。時が流れて鎌倉時代末期に下ると、「闘茶」が盛んに行われるようになり、また「会所での喫茶」が流行していった（『明月記』『太平記』）。



図3 石州流清水派宗家継承の証である3つの文献

石州流清水派宗家を継承する際に引き継ぐ3つの文献。石州流の祖である片桐石見守貞昌と  
 禅語・和歌を妙関子（老中・松平周防守康福）が記した「片桐石見守貞昌宗関居士像（妙関  
 子自画賛）」、2世動関が初代茶道頭道関について記した「渋紙庵之記」、片桐石見守貞昌がま  
 とめた将軍家の茶道の規格300箇条を動関なりに解釈した「清水動関註解石州流三百箇条」。

### 仙台藩茶道頭累代伝来の茶碗



青磁茶碗



白高麗茶碗

十一世大泉道鑑蔵

### 仙台藩茶道頭累代伝来の茶入



肩衝胴紐茶入



肩衝茶入(伊達泰宗様により修復)

十一世大泉道鑑蔵

### 十世大泉道鑑遺愛の大棗



左の**大棗**は、伊達家十八代当主**伊達泰宗様**から『**六十二万石**』の銘を戴いたものである。この**大棗**は、泰宗様の取り計らいにより、東京国立博物館中島淑枝氏が先代十世大泉道鑑のために製作した。**大棗**の表側は、総高蒔絵で伊達家の家紋「**竹に雀**」が描かれ、その内側は総梨子地で蓋の内側には**泰宗様の花押**が印されている。この**大棗**こそは、**伊達家と当流の茶道頭・宗家の永遠の太い絆**を象徴する芸術品である。

「**六十二万石**」の銘は伊達家十八代当主**伊達泰宗様**より戴いた**大棗**

図4 仙台藩茶道頭・宗家累代伝来の茶道具（十一世大泉道鑑蔵）

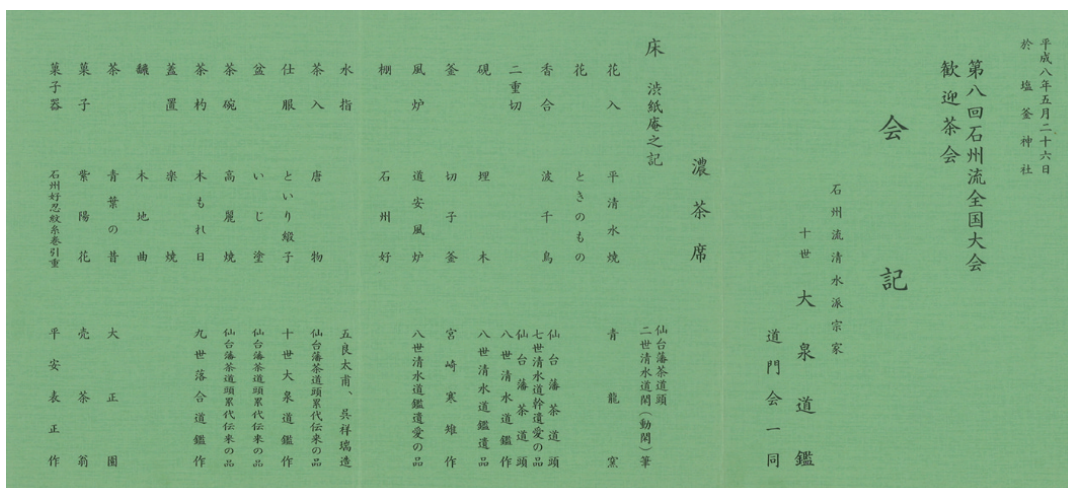


図5 第8回石州流全国大会の歓迎茶会会記  
 平成8（1996）年5月26日 石州流清水派宗家11世 大泉道鑑氏蔵

会記とは、茶会で使用する道具組を記した茶会の記録。道具の組み合わせはその茶会の趣旨に沿って行われ、会記を読むことによって、その茶会の趣旨や亭主の心配りを理解することができる。

ところで、室町時代後期を迎える頃になると、精神性を重視した「侘茶」が、村田珠光（應永三十年～文亀二年＝一四三三～一五〇二）により茶道に初めて禅味が加えられることによって創出され、「茶禅一味の説」が成立していった。その後、武野紹鷗（文亀二年～弘治元年＝一五〇二～一五五五）を経て千利休（大永二年～天正十九年＝一五二二～一五九一）によって、この侘茶が大成され、利休は茶聖と称され崇められるようになった。



図6 筆者による講演

徳川幕府が成立して身分制度が確立することに伴って、「町人の茶」に対する大名の茶という意識が芽生え「大名茶」が誕生した。この大名茶は、徳川将軍の茶道指南役とされる古田織部（織部流の祖 天文十三年～元和元年＝一五四四～一六一五）、小堀遠州（遠州流の祖 天正七年～正保四年＝一五七九～一六四七）及び片桐石州（石州流の祖 慶長十年～延宝元年＝一六〇五～一六七三）ら大名茶人の茶風を指す。石州は、大和国小泉の一万三千余石の大名で、茶道を千道安（利休の長男 天文十五年～慶長十二年＝一五四六～一六〇七）の高弟の大名茶人桑山宗仙（永禄三年～寛永九年＝一五六〇～一六三二）に師事して修行を積み、新しい作意をもって石州流を開いた。石州は、四代将軍徳川家綱（寛永十八年～延宝八年＝一六四一～一六八〇）の茶道指南役を命ぜられ、茶湯覚書三百箇條を懷紙三十九葉に書き記して将軍家へ献上した。これは、将軍家の茶道規格を定めたもので、世に『石州流三百箇條』と言われている。この三百箇條を基として、以後将軍家の茶道は、石州流となったため、全国各地の大名や旗本の間に広まり、一世を風靡した。また、石州の門下には逸材が多く独立して一派を開き、独自に発展を遂げた。

一方、仙台藩茶道は、仙台藩祖伊達政宗公（永禄十年～

寛永十三年＝一五六七～一六三六）により、その基礎が固められたことは、『伊達家治家記録』の記事からも明白な事実である（十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』。政宗公は、当時の将軍・有力大名や一流の茶人と交流することに並々ならぬ努力を傾注していた（図7）。また、これらの資料からも政宗公は、極めて社交性に富んだ人物であることが、容易に窺い知ることが出来る。ところで、政宗公の仙台藩茶道の基礎固めに、最も重要な役目を果たしたのは、京都の高名な茶人で、政宗公から初代の茶道頭として招聘された一世清水道閑（天正七年～慶安元年＝一五七九～一六四八）である。次に、仙台藩の茶道を石州流に変えるための土台作りに、多大な貢献をしたのは、二世清水動閑（慶長十九年～元禄四年＝一六一四～一六九一）である（図8）。二代藩主伊達忠宗公（慶長四年～万治元年＝一五九九～一六五八）は、二世動閑を石州の在所大和国小泉で十三年の永きにわたり弟子入りして修行を積むように命じた。二世動閑は帰藩後茶道頭に任ぜられ『清水動閑註解石州流三百箇條』の「茶書」に加え、一世道閑の故事来歴を記した「掛軸」を書き残している。前にも多少触れたが、この二種類の文獻に、その後四世清水道簡（享保元年～天明三年＝一七一六～

# 伊達政宗公と仙台藩茶道

## 『伊達治家記録（貞山公治家記録）』の記事

- 慶長 11 年 (1606) 二代将軍**徳川秀忠**に江戸屋敷で茶を進上。
- 慶長 15 年 (1610) 5 月 駿府で家康から茶入樋口肩衝を拝領。これ以降、将軍から茶を賜わったり、大名との茶会の記事が頻繁に見られる。
- 慶長 17 年 (1612) 12 月 石州流流祖**片桐石見守貞政 (石州)**の師範**桑山左近 (宗仙)**の名が初めて現われ、以後政宗は宗仙をしばしば茶会へ招いている。
- 慶長 18 年 (1613) 11 月 幕府御見廻・**田代養元**へ茶を饗したが、その際**一世清水道閑**に相伴を命じた。この時に道閑の名が初めて現われ、これ以降道閑はしばしば茶席に列している。
- 12 月 遠州流の流祖**小堀遠州**の名が初めて見え、硯二面、さけのごもりごせき 鮭子 龍 五尺に書を添えて遠州に贈った。
- 寛永 12 年 (1635) 正月 三代将軍**徳川家光**に江戸城で茶を饗し、茶入侘助肩衝を拝領。

図 7 伊達政宗公の茶道を介した将軍・大名・一流の茶人との交流

## 二代藩主伊達忠宗公 (仙台市博物館蔵)



石州流へ変える**基盤固め**に貢献した。

## 二世清水動閑

(慶長十九年～元禄四年ー1614～1691)

・一世道閑の姉婿飯田小左衛門の嫡子。名は紹之、**伝習庵**と号す。忠宗公の命により名を**道閑**、**道漢**、**動閑**と改めた。

・君命により、**片桐石州**のもとで13年間修業し、帰藩後、茶道頭を命ぜられた。

・『清水動閑註解石州流三百箇條』、(『動閑茶湯書』を含む)及び『澁紙庵之記』(「**三種の神器**」)を著わし、仙台藩茶道を**石州流へ変える基盤**を固めた。

図 8 仙台藩茶道を石州流にする基盤固め

一七八三)が入手した妙閑子(老中松平周防守康福)自画賛『片桐石見守宗閑居士像』の掛軸が加えられて三種類の文献となり、これらは当流の歴代の茶道頭・宗家がその代を継ぐ際に、「正しく継承した印」となるものである(図3)。

なお、現在、この「三種の神器」を筆者が保持している。前に述べた二世動閑が著わした二種類の茶湯書は、十世大泉道鑑(明治四十二年～平成二十二年＝一九〇九～二〇一〇)の母九世落合道鑑(明治十六年～昭和四十六年＝一八八三～一九七一)の代までは、門外不出の秘伝書とされてきた。しかしながら、十世道鑑は当流の十世を継承した後、このままでは輝かしい伝統を誇る石州流清水派の茶道頭・宗家を継承した印(「三種の神器」としてだけではなく、その「聖典」の役割も果たしてきたこの秘伝書が、歴史の闇に埋もれてしまうのではないかと危惧する毎日を過ごすことになった。そこで、それらの茶湯書の解読研究を始めると共に、仙台藩茶道の歴史の詳細なる調査・研究を開始し、これらの研究成果を本にまとめる決断を下した。これらの研究には十年近くの歳月を要したが、昭和五十五年(一九八〇)にようやく自費出版に漕ぎ付けることが出来た(『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』 図9)。更に、十世道鑑は、藩政時代から口伝によって伝え



図9 『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』を出版した十世道鑑(昭和55年12月24日付河北新報に掲載写真)

られてきた貴重な伊達文化を代表する優美な手前を、次の世代に末永く正しく伝えるため、正確に活字化した教本にまとめ、自費出版することにした。これらの研究・出版活動が郷土史研究家の古田義弘先生に学術的に高く評価され、十世道鑑は、「石州流清水派中興の祖」として『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』に取り上げられた(図10)。

**仙台 週間ベストセラーズ**  
(金港堂書店調べ)

① 仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ  
(古田義弘) 本の森 880円

② 3.11キヲクのキロク、そしてイマ。  
2021 (3.11オモイデアーカイブ) 2,200円

③ 看取るほどわかる命の重さかな  
(山室誠) 金港堂出版部 1,320円

④ ヒトの壁  
(養老孟司) 新潮社 858円

⑤ 母の待つ里  
(浅田次郎) 新潮社 1,760円

注) ⑥～⑩は割愛



郷土の偉人傳Ⅲ

古田義弘

本の森

十世大泉道鑑が取り上げられた『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』の内容の紹介



大泉 道 鑑 (康)

仙台東部道石州流清水派宗家十一世  
「政宗公ワールド」プロジェクト理事  
東北大学名誉教授

令和4年2月27日付  
河北新報の記事を改変

郷土史研究家  
古田義弘先生の著書

『関』32号2～19頁

図10 『郷土の偉人傳Ⅲ』における十世道鑑の人生

さて、仙台藩に石州流清水派を確立させ、それを全国各地に広めたのは、茶道頭三世清水道竿（さおどうかん 寛文二年～元文二年＝一六六二～一七三七）である（図11）。ここで、三世道竿が徳川幕府の茶道方の数奇屋頭（格）の谷村三育（？～宝暦三年＝？～一七五三）等の茶人までに茶の湯伝授を行っていた点が、特に注目される。この事実には、三世道竿が將軍家の石州流茶道にも、大きな影響を与えていたことを示すものである。これらの偉大な功績により、三世道竿の名は、清水派の開祖として茶道史に燦然と輝いている（『茶道辞典』『原色茶道大辞典』）。

ところで、茶道頭二世動閑の後継者に、血縁の清水快閑ではなく、それにこだわらず、一門で最も優れた茶人であった馬場道斎、後の茶道頭三世道竿を抜擢したのは、他ならぬ天下に数奇大名として知れ渡っていた四代藩主伊達綱村公（万治二年～享保四年＝一六五九～一七一九）である（図11）。この三代目の継承に関する詳細な経緯については、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』に記述されているので、参照して戴きたい。

綱村公は、当時一流の文化人で、特に茶道に造詣が深く、その執心の程は『伊達治家記録』の茶道の記事にだけでなく、『伊達綱村茶会記』の元禄六年（一六九三）～宝永

## 四代藩主伊達綱村公

(仙台市博物館蔵)



天下の数奇大名で、石州流清水派の確立と全国への広がり貢献した。

## 三世清水道竿

(寛文二年～元文二年ー1662～1737)

・仙台藩士馬場相薫の子馬場道斎、名は釣玄、耕閑子と号した(竿道竿; さおどうかん)。一門の中で実力が突出。

・四代藩主伊達綱村公及び五代藩主伊達吉村公の茶道師範で、石州流清水派を藩内に確立させると共に、全国にも広めた。

・石州流清水派の開祖で、茶道頭を継いだ清水家としては、三世と称した。

・著書:『道竿拾鉢』、作庭:旧有備館庭園と岩出山城下の家臣の庭園

図11 石州流清水派の確立

- 藩主のための手数(手前)(門外不出)。  
(1)極真の手数 (2)二連天目台子の手数(奥方同伴)
- 薄茶を重視する。  
「手前ハ薄茶ガ専也。是ヲ真ノ茶ト云。」(三世清水道竿著『道竿拾鉢』、本文3頁)
- 濃茶は、茶筌をよく振る。  
「茶筌で大きな泡を消し、少し黄味がかった緑色の細やかな泡がほんの少し盛り上がるようになる。」(十世大泉道鑑、『関』、7号、5頁、平成9年)
- 座礼(お辞儀):膝の横に拳を付ける(手のひらを付けない。)  
「手をつき喉に、手のひらを上に致し太指斗ゆびのはらを畳へ付候。」(十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』、112頁、昭和55年)
- 斜体(ひねり):亭主は、正客に対し斜体で向き合う(手前が正客から最も優美に見える角度)。
- 手前の動作が曲線を描く(曲線美)。
- 主菓子に小さい味噌漬二切れを添えることがある。(十世大泉道鑑、『関』、7号、6頁、平成9年)
- 茶の飲み方:茶碗の正面から飲む(その正面を避けない。)

図12 石州流清水派の特徴

二年（一七〇五）までの十三年間の茶会記録が、千三百回を優に越えていたことから推察することができよう。

筆者は今回の講演を総括するため、「石州流清水派の特徴」をスライドにまとめて解説を行って無事講演を終えた（図12）。

## 【謝 辞】

今回の企画展で、石州流清水派の資料の展示並びに講演を行う機会を賜った仙台市歴史民俗資料館館長鶴谷研様及びご指導・御協力下さった学芸員渡邊直登様に心から感謝申し上げます。古文書の解説の困難な箇所のご指導を賜わりました元宮城県史編纂室故岩間初郎先生に謹んで感謝の意を捧げます。

## 【参考文献】（五十音順）

『片桐石州の茶』米原正義等 講談社 昭和六十二年

『関』（第二十八号）十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会 平成三十年

『関』（第三十二号）十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会 令和四年

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五十年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條』（三卷）二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑）丸善出版センター 昭和五十五年

『数寄道心法』東京国立博物館蔵

『石州流系図写并聞書ノ写』鈴木政道 東京国立国会図書館蔵

館蔵

『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』古田義弘 本の森 令和四年

和四年

『伊達家治家記録』仙台市博物館蔵

『伊達綱村茶会記』酒井巖 中央公論事業出版 昭和四十二年

四十二年

『茶の湯入門』熊倉功夫 平凡社 昭和六十年

『道竿拾躰』十世大泉道鑑 十一世大泉道鑑『茶の湯文化学』

二十八号 平成二十九年

『道竿拾躰』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵

『動閑茶湯書』（十八冊）二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『動閑茶湯書』の解説と校注（その一）『露地之書』十世大

泉道鑑 十一世大泉道鑑『茶の湯文化学』三十三号 令和

和二年

『動閑茶湯書』（その二）『茅葺敷寄屋寸法』 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑『茶の湯文化学』三十七号 令和四年

『細川三斎茶書（上巻及び下巻）』細川三斎 国立国会図書

館蔵

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 榊淡交社 平成十九年

### 【付記】

十世大泉道鑑が取り上げられた『仙台領に生きる郷土の偉人傳Ⅲ』の内容については、筆者がすでに『関』（三十二号）で紹介させていただいた。この本は、郷土史研究家古田義弘先生の著書『仙台領に生きる郷土の偉人傳』のシリーズの三番目のものであった。今までⅠ～Ⅴまで出版されたが、いずれも仙台市民から注目を浴び、五回連続で「仙台市の書店で最も売れる本（週刊ベストセラー）」（金港堂書店調べ）に輝いた。なお、書店（発行所）の問い合わせ先は、左記の「本の森」です。

仙台市若林区新寺一丁目五-二六-三〇五

電話・ファックス 〇二二-二九三-一三〇三

## 仙台藩茶道頭・宗家累代伝来の祥瑞水指



十一世大泉道鑑蔵

すうてい  
・中国明代末期(崇禎年間－1628～1644)に中国・景德鎮で焼かれた染付の茶器。茶陶の染付では、最上の茶器され尊ばれてきた。日本の茶人による注文品で、伊勢松坂の伊藤五郎太甫が中国で作製。祥瑞、五郎太甫、呉祥瑞の「銘」がある(呉は地名、祥瑞は五郎太甫の号)(『原色茶道大辞典』『茶道辞典』)。  
・この水指の底には、「五良太甫 呉祥瑞造」の染付銘が記されている。